

# ハシブトガラスは高みの見物 ～時々、歩きますけどね～

講師：松原始

東大総合研究博物館特任助教



ハシブトガラスは恐らく、好むと好まざるに関わらず、日本でもっとも身近な鳥の一つである。一方で、その実体はわかっているようで、よくわからない鳥でもある。

ハシブトガラスの英名は Jungle Crow、すなわち密林のカラスである。日本ではむしろ「コンクリートジャングル・クロウ」だ。だが、ハシブトガラスが都市の鳥である方が、例外的なのである。

ハシブトガラスの生態や行動のあちこちには、森林性でスカベンジャーという出自が垣間見える。例えば、ハシブトガラスはなぜ、あんなに大声で良く鳴くのか。なぜ、農耕地には少ないのか。なぜ、マツやクスノキに好んで営巣するのか。なぜ、抱卵中の雌はわざわざ巣の外で餌を受け取るのか。なぜ、縄張りを外れた場所での採餌が観察されることがあるのか。これらはハシブトガラスが森林性で、捕食者と食べ残しを探し回る鳥だったから、と考えることもできる。

実際、ハシブトガラスは間違いなく森林性の鳥である。日本の、人のいない森林にもハシブトガラスは生息している。ただ、我々が都市で体感するほどの密度ではなく、見慣れた「騒がしい鳥」でもないが故に、カラスがいる事に気づいていないだけなのだ。もの静かで森林に潜む大型鳥類、それもまたハシブトガラスの真実の姿である。

さらに、ハシボソガラスと比較することでハシブトガラスの行動の特徴が見えて来る。ハシボソガラスは明らかに平原性、疎林性の鳥類である。ハシボソガラスと比べると、ハシブトガラスは「歩かない」のだ。もっと言えば「地面が嫌い」である。さらに「見えないものは存在しない」という信念で生きている、かもしれない。彼らは常に「高みの見物」を決め込み、面白そうなものを探して飛び回り、できることなら地面になんか下りたくないのだ。

…と、そう思っていました。八重山を訪れるまで。

八重山のハシブトガラスは本土の亜種とは全く違う行動を見せる。彼らは「歩く」のだ。島によってはハシボソガラスと見まがうほどに地面に下りている。それ以外の行動も全く違う。見た目まで違う。

これはカラス類の適応性、あるいは急速な進化を物語っている。そのような目で見直せば、東京のカラスさえも15年前とは違う行動を見せているかもしれない。このように、理解したと思った瞬間に何食わぬ顔でこちらの想像を裏切ってみせるのも、カラスの尽きることない魅力の一つである。

## ●講師プロフィール

1969年奈良県生まれ。

理学博士。東京大学総合研究博物館特任助教。

カラスの生態、行動および進化に関して研究を行っている。



日時：平成25年11月2日（土） 14時30分～16時00分

場所：アビスタ（我孫子市生涯学習センター）ホール

主催：我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所